

# 日本山岳会 越後支部報

## 第 21 号

平成30年2月15日  
発行 公益社団法人日本山岳会越後支部  
発行者 遠藤 家之進正和  
新潟県新潟市南区鷺ノ木新田1049  
TEL・FAX 025-362-5004  
広報委員長 佐久間雅義



## 私の一枚

### 金北山 (1,172m)

金北山は、佐渡島の大佐渡山地のほぼ中央に位置し、佐渡島の最高峰です。

古くは北山と呼ばれていましたが、江戸時代初期に佐渡に金が出るようになってから金北山と呼ばれるようになりました。

私の職場から、毎日この雄々しい金北山を眺めています。

撮影 大場 勲

## 新しい年を迎えて

支部長 遠藤 家之進正和

平成も30年の節目となり、変革が予測されそうですが、各位には新たな気持ちで新年を迎えたこととお慶び申し上げます。

子ども達に自然観察、登山体験を通して

ふるさとの山を知り、自然からの学びを深めてもらおうと、第1回糸魚川世界ジオパーク「子ども登山教室」を昨年12月の日に開催しました。「みどりをみどり」と感じる

気持ちを大切にしたい「素直な感受性を大事にして欲しい」ことを挨拶の中で話しました。白池周辺の自然観察、葉っぱを8枚採集し、一番気に入った葉に名前をつけて紹介する。外来植物の確認、戸倉山

登山を通じて子ども達から、「植物のことや人のやさしさを学ぶことができた」との感想が寄せられ、私どもが目指した豊かな心を育てる一助となったと感じました。

戸倉山から小蓮華山まで、段階を踏んで体験していく計画としている「子ども登山教室」は、次世代を育てる事業を推進することができ、有益と考えます。本事業は5

年間を予定しており、支援内容も増大し、より安全な運営が求められることでしよう。支部活動は会員相互友好の登山活動だけでなく、育成事業を担うことも必要であ

り、1人でも多く、協力していただける会員の申し出をお願いします。

那須湯元スキー場で高校生の雪崩遭難事故、日本山岳会会員の富士山、北海道幌尻岳の遭難事故等で貴い命が失われました。

これらの事故を受けて、本部遭難対策委員会では左記のような趣旨とした規程を改訂し、2017年12月25日付で、施行することが通知されました。

○すべての会員に対して、他の団体での行事参加を除き、すべての山行において登山計画書を委員会に提出すること。

○支部組織内で行うすべての山行の登山計画書を受理し、適切なチェックを行う体制を整えること。チェックを通った計画書を委員会に提出すること。

当支部でもこの通知を受け、三役・委員長会議で対応策を検討し、支部内の体制を整え、支部会員に周知を図りたいと考えています。煩雑性、疑義を感じる会員もいる

かも知れませんが、登山計画書を作成することは、登山の基本であり、安全登山を意識するためにも大事なことと考えています。自分の身を守るためにとご理解を頂き、ご協力をお願い申し上げます、新年のご挨拶と致します。

## 越後の峠路を歩きましょう

羽賀 一蔵

国土地理院の20万分の1地形図には、新潟県に関わる峠がちょうど80座あります。

その峠のすべてを踏んでみようと考えたのは、私が定年退職して少し時間的余裕ができた頃ですから、今からおよそ四半世紀余も昔の話です。

この80座のうち、どうしても立つことができなかったのは2座あります。入山禁止の焼山の肩にある富士見峠と、もう一つは西頸城の鷹峠とんひです。こちらは麓集落の区長さんから強く止められました。「あの峠は藪で迷路だ。地元人も誰も入れないのだ」という事で諦めざるをえませんでした。

さて、私は新潟県の人間だから、県境の峠でも、すべて入山口は、どうしても新潟県側から独り旅と決めました。

どうして、どうして、まだ見ぬ峠は先人の踏み跡であり、峠を越えれば別の土地の文化や生活交流の息吹が感じられるかも知れないと思うと、資料集めや下調べにも生ききとしていたことが思い出されます。

すでに私も古い、往時茫茫たるものがありますが、それでも難儀して越えた峠の多くはなつかしく鮮明に思い出されます。

不安の塊になって越えた八十里越などがそうです。英傑河井継之助が戸板で越えた鞍掛峠・木ノ根峠です。私が初めて入った頃には下田村の廢村吉ヶ平よしがひらから会津叶津かのづまでの峠道は藪に閉ざされると聞きました。

土地の古老や営林署森林官へ葛塚銘酒を下げて森林地図や情報を得ました。

当時は、鞍掛峠と木ノ根峠に小さな石の祠があるばかりで、人工物は何一つありません。途中の小沢を跨ぐ度に背丈ほども降り降りする程に道は荒れていました。道程中ほどの田代平でツエルトの中で聞くトラツグミの鳴声も不安だったことを今に覚えていています。

この歴史の峠道も、今工事中の新道ができれば、又しても藪に閉ざされるのでしょうか。中越には、他にも度々思い出す峠があります。越後と江戸を結ぶ歴史の三国峠があります。殿様も、良寛様も、白秋もスネルも無宿人の群も、みんなここを越えています。「ここがへい あちゃと だんべのくにさかひ」とは、越後・信州・上州方言を巧く織り込んだものだと感じます。

名だたる清水峠は上杉謙信の軍用道路でもあります。何か庶民生活の臭いを感じられない峠道でした。夏の暑い日歩きました。

上越には、いかにも奥深く静寂重厚さを

感じた野々海峠ののみのみがあります。不思議な龍神伝説を持つ県境の風格のある路でした。

中頸城から信州飯山に至る越後にとって忘れてはならない程大事な関田峠もあります。文化的にも生活的にも米塩桑湯など、峠で交易の市が立つ峠で、謙信も越え、著名な学者佐藤一斎もここから越後に入り、越後を去る親鸞もこの峠を越えて行きました。

さて、お仕舞は下越です。下越の峠は、一種特異な様相があります。それは、旧東蒲原全体が明治19年までは会津領であり、どの峠路も重厚な会津文化が滲み込んでいます。

殿様街道と呼ばれた諏訪峠を厳冬期に幕末の吉田松陰が越え、血気盛んな漢詩を遺しています。私も大雪の年、山スキーで峠の先へ登り黒々とした日本海を目にしたことがあります。

ほとんど知られていない沼越峠も思い出深いものがあります。旧上川村の奥、柴倉から会津金山町へ抜ける峠です。今はもう踏み跡さえも定かではありませんが、奥会津の木伐筏を津川の川港まで流し、筏師達の帰り路に使った峠路ですが、野性味に満ちたものでした。こういう峠もあるんだな

あと、つくづく思う程の山路で、山岳会員に勧めたい路です。

有名な万治峠のことは、当会員の森澤堅次氏や、会津坂下にある「万治峠学会」の方々が度々すぐれた論文を発表されていますので、私は、ここでは遠慮します。

先人が汗と涙で拓き、文化や物資の交流の峠道も、近くにトンネルや車道が開かれると、間もなく山道は藪に閉ざされ、消えていってしまう。それでいいのでしょうか。

今やGPSがあり、スマホ、パソコン、2万5千分の1の地図がある。大げさの覚悟するほどの危惧、苦勞をしなくても峠を辿れます。先人が愛し大切にした峠路を、地学・地政学・民俗学・自然科学などの目でしっかりと見、学問的な資料を今のうちに残しておきたいものです。

最後に、拙著「越後佐渡の峠を歩く」は、すでに絶版になっていますが、図書館などで目にしていたら望外の幸です。



新入会員7名も参加して、  
楽しく、盛大に!!

### 平成29年度 日本山岳会越後支部年次晩餐会

後藤 正弘

平成29年12月9日(土) 新潟市の新潟東映ホテルにおいて、68名が参加して恒例の年次晩餐会が開催されました。

支部活性化に向けて、新たに糸魚川世界ジオパーク「子ども登山教室」や上高地集會などの事業を増やし、新入会員獲得に努めてきました。結果、昨年の晩餐会以降11名の新たな仲間を迎えることができました。また、越後支部創立70周年記念号として『越後山岳』第13号の発刊、本間一人会員の環境大臣表彰祝賀会も併せて、多くの会員参加で盛大に行われました。

遠藤支部長からは、「昨年11月富士山登山中の際尻岳下山中の死亡事故(いづれも広島支部)を受けて、日本山岳会の安全登山・遭難防止の対応として、会員が行うすべての山行について、登山計画書を遭難対策委員会へ提出することが必要になった。支部としても体制を整備していく」との見解が示されました。

交流会に先立ち、山崎新支部名誉会員の

紹介や佐藤高晴会員による「私の環境に関わる活動」と題した講演会も開催されました。古地磁気学、環境学、再生可能エネルギーの専門家(工学博士)の観点とこれまでの登山経験から、環境に関わるお話を頂きました。

毎年楽しみにしている会員も多く、遠く秋田県から小林収さん、山形県から青木督平さん、千葉県から会友の節田重節さんも出席され、交流会ではお酒を飲みながら、和気あいあいの楽しい会となりました。



### 新会員になって

多田 和広

今年度、日本山岳会越後支部に入会させていただきました。会員番号16166多田和広といます。

近年は登山という大きなくくりの中で、山に対してトレイルランニングやボルダリングなどスポーツ競技としての側面を見ることが多くなってきました。今までにならぬ新しい志向というものができてきているように思います。

しかし、この1年山に通って感じたのは登山人口の減少が明らかに進んでいることが感じられたことです。その時代の流れの中で自分がこの先、山に対してどのように携わり、そしてどのように魅力を発信していけるのか。

歴史のあるこの会を通して諸先輩方から山とは、という問いを学びながら、そして楽しみながら見つけ、いろいろな人と共有し、それが会を盛り上げる一助にすることができればと思っています。どうぞよろしくお願いたします。

廣井 博行

此のたび伝統ある日本山岳会越後支部に入会させて頂きました廣井博行と申します。

所属山岳会は、柏崎山岳会です。会員数は34名と少数で、平均年齢も55歳位で高齢化してきております。小生も齢70歳を迎えようとしています。若い時のように岩登り、沢廻りの回数は減って、今は普通の尾根の登山とスキー(バックカントリー)を中心に山を楽しんでいます。

今後の自身の目指す方向は、越後のマイナーな山を目指したいと思っています。それと越後支部の持っている技術、技能、知識などを参考にさせて頂きたいと思っております。今後ともよろしくお願いたします。

坂野 雅之

数年前より橋本正巳様から入会のお誘いがあり今回、歴史ある越後支部へ仲間入りさせて頂きました。荒川ワンダー・フォーゲルも設立44年目を迎え高坪山と共に歩んで来ましたが、3年前から登山口に自動カウンターを設置して入山数を把握しています。

昨年は2万4千人で3年間の平均は2万人の登山者が訪れる里山となりました。還暦の過ぎた身体に任せ高坪山維持管理と県山岳協会自然保護委員会事務局を山のライフスタイルとして何時まで続けて行けるかが課題です。

渡邊 忠次

このたび歴史と伝統ある日本山岳会に入会させていただきました。入会后毎月送付されてくる会報「山」や立派な会誌「山岳」を拝見するたびに、高齢者と言われる年齢で、これといった能力の無い自分に会員の資格があるのだろうかと思いの念に駆られている日々であります。日本山岳会の名を汚すことのないよう「自己研鑽」に努めて行きたいと思っております。

入会のきっかけは、「藤島蔵書」の取り持つ縁によるものです。ご承知の通り日本山岳会初代越後支部長「藤島玄」氏の蔵書が関川村に寄贈され、その整理作業に越後支部が大きく関わったことは、支部報第12号（2015年2月）、17号（2016年10月）や越後山岳13号（2017年12月・越後支部創立70周年記念誌）に詳細が掲載

されていますが、その作業のお手伝いをする機会があり、支部会員が真摯に作業に取り組んでいる様子に、自分も仲間に入れてもらいたいと思ったことがきっかけでした。私の山歴は、1970年に関川村山の会に入会し、地元の山々（飯豊連峰・朝日連峰）や里山を中心にひたすら「歩く」山行でした。本格的な沢登りや岩登りの経験はありません。これから皆様方との交流を通じてながら幅広い登山ライフを楽しんでいきたいと思っております。ご指導のほどよろしくお願いいたします。

故加藤明文さんを偲び

日本山岳会会員（7758）

橋本 正巳

2017年11月14日加藤さんの訃報に接し、落ち込む心のやり場に戸惑いました。

故加藤さんは1937年、私は1938年生まれの一つ違い。その上故加藤さんは東京生まれ、そして小生も同じく東京生まれでありました。そんなこともありお互い意気投合し、酒を良く酌み交わさせていただきました。酒を飲む中でお互いの私の強さを自慢し競い合ったりもしました。植物の造詣の深さから北海道、佐渡、北信濃を中心に1999年5月には「山の花めぐり」、2005年には「新潟県の山の花」を執筆され、登山歴60年の歩みの中で培われた高山植物に打ち込む姿勢は真似が出来る範疇を超えたものでありました。しかもご夫婦での活動は傍目で見ても羨ましく思われるものです。私共高田ハイキングクラブ50周年記念祝賀会に際してご無理を申し上げ、想い出多き実のある記念講演をお願いしました。故加藤さんが病と闘って居られた時、奇しくも私も術後生活でした。こんなことを似た者同士というのでしょうか。また藍綬褒章も同じく受賞させて頂き、他人とは



思えない存在でありました。

日本山岳文化学会会員、日本山岳会会員（8058）、むささび会会員、等数々の重責を全うされ、今後も一層のご指導を賜るうとしていた矢先、誠に残念なことであります。

流水落下、変転定め無き世とは申せ、ありし日の加藤さんを偲び、心からの哀悼を捧げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

合掌

杉本敏さんの死去を悼む

日本山岳会会員（15514）

諏訪 恵一

平成29年11月3日、奇しくも1年前の同日に自然公園指導員としての功績により藍綬褒章を受けられた杉本敏さんが、享年68歳という若さで生涯を閉じられた。平成28年12月には、自身の山岳生活50年の記録を綴られた「山に憑かれて・50年の記録」を出版されたばかりで、ライフワークである一等三角点の山、全山踏破を目指し、毎月山行しておられただけに残念である。新潟県山岳協会の事務局長を10年以上にわたり務められ、また、高校教諭として、若者を山へと導かれた功績も大きい。改めて、ご冥福をお祈りいたします。

### 土田幸雄さんの逝去を悼み

日本山岳会会員（9789）  
森 庄一

平成29年10月16日土田幸雄さんが逝去されました。

土田さんは、会員番号4241で、1954年11月入会の永年会員でしたが、平成15年に行政勤務の関係で瑞宝小綬章を受けられたのち、平成6年に圧雪で倒壊した苗場山神楽ヶ峰に設置の大型石塔「天下之靈観碑」の修復調査を平成22年に所属団体（長岡ハイキングクラブ）会員を率先して引率され調査終了し、その後修復がなされた。更に、所属団体の委員として山行のリーダーを多数回務めたほか、参加事業でも指導者として活動された。

また、新潟県山岳協会の総務委員長、副会長、参与として28年の永きにわたり役職を務められ、その功績は大きい。



### 山靴シリーズ

### 山・人・花と三途の川

山田 智子

思いがけず平成28・29年に入院を繰り返して、ようやく普通に近い生活が可能になった現在である。病室の窓越しから、遠望の山々や佐渡を眺めながら、これまでに登った山、大勢の人達との出会い、山野草、高山植物との巡り合わせなど、山に係る多くのことを思い出していた。

そんな入院中に忘れられない夢を見た。熟睡できなかったある夜、目の前に川幅が狭いのに急流で渡ることができない川が現れて、川向かいに今は亡き両親と夫をはじめ、お世話になった五十嵐 篤雄さん、室賀 輝男さん、藤井 信さん、小野 健さん、満面の笑みで手を振っていた。寝返りも苦しかった時に、二度も同じ情景を見たので明瞭に残っている。後日このことをある人に話すと、嘘か誠かそれは三つある三途の川の一つであると言う。私に寿命があったことになるらしかった。生かされている、頑張らなければ!! と素直に思った。

今も加療中であるが、記録に残る山歴も山行も無いが、窓辺のベッドでは本当によく山々を、それも花々を追っかけていたこ



とが頭の中を一杯にしていた。思えば山野草は角田山と佐渡の山、高山植物は白馬連峰が我が師匠で、数多くの機会を与えてもらったと改めて実感させられた。そしてその花々を思う時、大勢の人達との出会いが必ず浮かび、どれだけ励まされたか分からないほどである。

又、『もう一度山に登りましょう』と、元氣付けて下さった病院の先生方、たとえその日が来なくても、希望を持って治療していこうと肝に命じることができた。

かの大先輩と酒と花の違いであるが、山・人・花は、山登りを始めた時に付けた雑記帳のタイトルである。現在はすっかりさぼっているが、近い将来、山に登って花々を愛で、大勢の人達と語り、何かを綴られる日が来ることを信じてたい。

### 三国権現社の木版彫刻

佐藤 芳英

昨年の10月28日(土)に三国峠を経て、三国山へ登って来た。そのとき三国峠にある三国権現の社殿に川柳の木版彫刻(写真を参照)が掲げられていた。その木版彫刻には、「ここはへえ あちゃとだんべの 国さかい」とあった。「へえ、あちゃ、だんべ」は、それぞれ越後、信州と上州の方言であり、「へえ」が「応答の声、はい」で、「だんべ」が「なにになにだろ」のことと解ったが、「あちゃ」の意味が何なのか今でも解らない。知っている方がおりましたら教えてください。



# スノートレッキング 同好会からのお知らせ

小千谷市の

最高峰でスノートレッキングを

楽しませよう

山行名 金倉山(581m)

スノートレッキング

期 日 平成30年2月25日(日)

集合場所 小千谷市総合体育館駐車場

集合時間 午前9時

コース概要

小栗山口9:30 ↓ 南尾根10:00

↓ 前金倉10:30 ↓ 11:00金倉山

11:30 ↓ 12:30小栗山口

(登り 1時間半 下り 1時間の行程

です)

装備等 冬山登山の服装および

カンジキorスノーシュー

会 費 500円

申込先 松井潤次

090-4621-1825

締 切 平成30年2月22日(木)

# 事務局からのお知らせ

●引き続き会員拡大へご協力を!!

この1年、会員の皆様のご協力により11名(一昨年の晩餐会以降)の新しい仲間を越後支部に迎えることができました。ありがとうございました。

しかし、越後支部会員の平均年齢は73歳と全国平均より5歳高く高齢化が急速に進行しています。今後、会員の減少が加速されることを危惧しています。支部では活性化に向けて、事業を増やし魅力ある山岳会づくりに努めています。今後も厳しい現状を支部全体で共有し、引き続き新入会員勧誘にご協力ください。

支部事務局へ問い合わせいただければ「パンフレット」及び「入会申込書」を送付します。是非、お声がけください。なお、「入会申込書」は日本山岳会ホームページからもプリントできます。

●越後支部ホームページが

リニューアルオープン!!

是非、覗いてみてください!!

越後支部ホームページが、昨年7月からリニューアルオープンしました。随時更新して、ホットな情報を提供しています。是非、覗いてみてください。

また、表紙写真の投稿を受け付けています。皆さんの素晴らしい写真を表紙に登場させてください。

詳しくは、佐久間広報委員長へお問い合わせください。

☎090-12263-7281

支部会員動向 (2017年9月

～2018年1月)

## 1 物故会員

平松 勝司 (9458)

新潟市北区 9月逝去

土田 幸雄 (4241)

長岡市 10月逝去

杉本 敏 (14521)

長岡市 11月逝去

加藤 明文 (8058)

新潟市西区 11月逝去

小林 忠雄 (6104)

新潟市北区 11月逝去

竹内 満雄 (4480)

上越市 12月逝去

## 2 退会者

諏訪 武 (8904)

長岡市

小林 重一 (13506)

新潟市西区

## 3 新入会員

江口 健 (A0091)

新潟市中央区 10月 準会員

渡邊 忠次 (16253)

村上市 10月

小池 信吉 (16269)

村上市 11月

小野寺昭彦 (16280)

長岡市 12月

知野 勇人 (16288)

新潟市東区 1月

## 4 支部会員総数

(2018年1月20日現在)

192名

# 編集後記

今号は、新入会員(平成29年5月から10月に入会)の方々から「山に対する想い」等について書いていただいた。今後、当会においての活躍を期待します。

また一方で、逝去された会員への追悼文を載せることとなった。改めてご冥福をお祈りいたします。

誌面の作成に当たり、ご協力をいただいた方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。

(編集..佐藤 芳英)